

## 第七回 公開研究会

# 『丸山眞男講義録』別冊

## 合評会

渡 辺 浩

二〇一八年七月七日、東京女子大学二四二〇二教室で、第七回の東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター公開研究会が開催された。今回は、『丸山眞男講義録 別冊一 日本政治思想史一九五六／五九』『丸山眞男講義録 別冊二 日本政治思想史一九五七／五八』（東京大学出版会、二〇一七年）の合評会としての開催だった。

登壇者は、都築勉氏（信州大学名誉教授）と前田勉氏（愛知教育大学教授）、および編集委員を務めた平石直昭氏（東京大学名誉教授）、宮村治雄氏（前成蹊大学教授）、山辺春彦氏（元東京女子大学特任研究員）だった。当日は、まず編集委員三名から約一〇分ずつ発言があり、ついで、都築・前田両氏が約三〇分ずつ報告した。その後、質疑応答がなされた。司会は、私が務めた。

以下は、当日配布された資料と手元の記録を基に、私の責任において、当日の発言を要約したものである。

### （１）平石直昭「徳川体制と儒教との関係について

#### ―津田説と丸山説（その変化）の検討を中心に―

丸山は、『日本政治思想史研究』の第一論文（初出は一九四〇年）で、徳川家康が林羅山を重用して朱子学を振興し、朱子学が近世初頭の思想界で独占的な地位を占めたとし、一時、これが学界で通説化した。しかし、既に一九一六年に津田左右吉は、このような見方を真っ向から否定していた（『文学に現はれたる我が国民思想の研究』）。しかも、歴史認識としては、津田が正しい。丸山も、一九六六年度、六七年度の講義で自説を修正し、英訳『日本政治思想史』序文（一九七四年）でそれを公表した。ただ、丸山は、体系的教義としての儒教と、一般的な思维範型（世界をみる際の視座構造）としての儒教とを分けて考える立場を取る。その考えは既に一九四二年に明らかにしており、『講義録』においても、後者の意味では儒教を近世日本の体制イデオロギーといつてよいと、なおも主張したのである。なお、近世思想史の発展

全体に関する津田と丸山との学説内容の継承・批判関係については、平石「戦時下の丸山眞男における日本思想史像の形成」(『思想』九六四号、岩波書店、二〇〇四年八月)で、一定の検討を行った。

## (2) 宮村治雄『丸山眞男講義録 別冊二』

### 日本政治思想史一九五七／五八』について

丸山は、みずからの日本政治思想史の研究について、一九五〇年代後半期に「縦の発展段階論に立つ見方から、異質な文化接触による横からの衝撃という分析視角を投入する見方への変化」があったとしている。それは、講義内容にも、二つの面で現れている。第一に、五六年度講義における、「古神道の伝統」における「組織や制度の原理」の欠如、「究極的絶対者」の不在、「抽象的規範原理」に代わる「美意識による統一」、「具体的場面における状況の倫理」等の日本思想の特質の確認である。これは、五七年度講義では、日本思想史を貫く「外来思想に対する敏感さ」と「同化的伝統の強さ」とのパラドックスとして再定位されている。第二は、「異質な文化接触による横からの衝撃」がもたらす「変革」や「飛躍的發展」の可能性の指摘である。五七／五八年度講義では、これが主たる関心である。

この第二の面の具体例とされるのが、十六世紀から十七世紀にかけてのキリシタン伝道との出会いである。その伝道は、権力による苛烈な弾圧で終わるが、「人格的個性の自覚」「生の歴史的一回性の自覚」といった思想的契機を内面化させ、「日本思想史全体を通じて見ても

貴重な収獲」と評価される。一方、徳川支配体制は、政治・文化の隅々まで浸透した closed society としての特質が強調される。そして、それが「開国」を契機にしてどのように、またどこまで open society の論理・心理・行動様式に変容していくのかが論じられる。特に五八年度講義では、「典型的に〈closed society〉の思考様式」をとる「尊攘運動」が「開国」への媒体となった「歴史的アイロニー」、また、「視圏の拡大」が「closed society」に発酵する自己中心的な独善意識と、ともどもない対外的猜疑心と恐怖心の混交した意識をときほぐす機能を持ち、しかもそこでは「認識主体のもつカテゴリーの自己変革」が重要だったこと等が指摘されている。

なお、「開国」を廻る丸山の新たな考察は、「戦後」の開国と重ね合わされていた。しかし、後年、丸山は「開国の変革的契機」としての評価において、次第にペシミスティックになっていったようである。

## (3) 山辺春彦『丸山眞男講義録 別冊一・二 について』

五七年度講義において、丸山は「ヨーロッパにおけるキリスト教、イスラム圏における回教、中国に於ける儒教」のような「歴史の中にあって歴史を越えたもの、即ち絶対者であり、形相 *eidōs*」を意味する「原理的実体」は日本にはなかったする(「まえがき」)。一方、江戸時代には「儒学が思想的に orthodoxy の地位を占めた」とする。これは、一見相互に相容れない発言のようである。しかし、これは、中国と異

なり、江戸時代の儒学が、「本格的な『正統』の条件を充たさない」（「原型・古層・執拗低音」（二九八四年）ものとして捉えられていたとすれば、矛盾しない。その「正統 orthodoxy」（「O 正統」とは、「両極性の統一という条件を充」たし、「世界観としての全一性を具え」ているものである（「闇齋学と闇齋学派」一九八〇年）。そして、「正統と異端」研究会の記録（『丸山眞男集 別集』第四卷、岩波書店、二〇一八年。「正統と異端」研究会報告原稿『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』第十一号、二〇一六年。）によれば、丸山は、「文明の精神」を今日的に読みかえて、それをわれわれの Orthodoxy にすること」を課題としていた。

丸山にとって、五〇年代後半の講義は、一方で、O 正統の形成を妨げてきた日本思想の底辺における「不変なもの」を対象化し、他方で、「開国」という歴史的経験を吟味することによって、日本の思想的伝統から、戦後という「開かれた社会」における「われわれの Orthodoxy」の形成の可能性を探る試みであった。

#### （4）都築勉「歴史主義からの脱却」

長い結核療養から一九五〇年代後半に復帰した丸山は、「進歩」か「反動」ではなく、その両極に「抵抗」する少数者に注目するようになる。それは、五六年秋のハンガリー事件が契機であろう。丸山は、普遍的に社会主義勢力が世界の先頭に立つという進歩主義的な発展段

階の思考から次第に離脱していったのである。それは、普遍的な発展段階論という意味での「歴史主義」からの離脱である。さらに、丸山は、科学的真理が政治の隅々まで支配するというマルクス主義の前提に対しても、いよいよ懐疑的になった。そして、政治的営みの独自性の意義を一層強調するようになっていった。また、五七年頃には、革新的知識人の間で、日本国憲法擁護・戦後民主主義擁護という目標がゆるやかに共有されるようになっていく。六〇年安保以前に、精神的気候の大きな変化が訪れていたのである。

丸山の思想史への接近方法は、五〇年代後半に、主として変化に着目する歴史主義的なものから、持続に着目する構造主義的なものに変わった。しかし、思想を主にその機能から捉える、という点では一貫している。思想が政治過程の一つのモメントとしていかに機能するかに注目するのである。さらに、政治と思想のダイナミックな相互作用を明らかにしていくのである。日本政治の現状分析や狭義の政治学から撤退しても、丸山の思想史研究は、終始、政治思想史研究だった。それを支えたのは、いったん政治の舞台に投入された思想がいかなる帰結をもたらすかということについての鋭敏な感覚だった。

#### （5）前田勉「丸山眞男の江戸思想史像」

五七年度講義を、『日本政治思想史研究』と比較すると、朱子学の役割が大きく、徂徠学の比重は小さい。それは、分析視角の変化という

理由のみによるのではないであらう。

五七年度講義では、「閉じた社会」としての幕藩体制が「戦国体制の凍結化」した「兵営国家」であると捉えられている。その「統治技術」を説明する際の資料は、幕末明治期に来日した外国人の記録と明治以降の思想家の言説である。しかし、これは、同時代のクルワの外にあった史資料による説明であって、問題がある。そもそも、「兵営国家」としての徳川幕藩制の「統治技術」の思想など存在しなかったのではないか。

また、五六年度・五七年度講義は、六七年度講義における、学問としての儒学とイデオロギーとしての儒学の分離に向けての端緒だった。そして、五七年度講義は、朱子学的自然法が閉じた社会のイデオロギーだったとし、特に「職分」「分限」の思想に注目する。しかし、「職分」「分限」思想が朱子学的自然法であったかは疑わしい。世襲的な職分・家業に満足し、高望みするなど説く分限論は、老荘・仏教思想、あるいは神儒仏の三教一致思想であらう。そうだとすれば、朱子学がイデオロギーとして正統だったという説には疑義が生ずる。

構造・類型論は、閉じた社会を一つの完結した体系として描くことにおいて優れているが、変化・発展の説明が難しい。丸山は、構造内部のバランスの変化を指摘するが、内部からの発展というよりは外部としての西洋からの衝撃を変化の主要因とする。これでは、変化はいつも外から来るという宿命論に陥るのではないだろうか。

しかし、実際には、丸山講義録も触れている二つの内発的契機があっ

た。一つは、町人道である。丸山は、町人道を内面的な規範意識を欠くものとして否定的に扱うが、才智と「芸」（技術）によって「国益」「天下の益」を「工夫」し、現実を切り拓いてゆく能動的な態度・意識もまたあったのである。もう一つは、公議輿論である。自発的に結社し、コミュニケーションしたとして評価される明六社以前に、既に十八世紀には、一冊の本を複数の同志が討論し合いながら共同読書する会読が盛んになり、会読する結社が生まれていた。そこに公議輿論の端緒があったと見るべきである。

このように、丸山の問題意識を継承しながらも、新しい事実を掘起こし、より豊かな江戸思想史像を構想していききたいものである。

## (6) 質疑応答

以上の発言の後、登壇者相互、および出席者と登壇者との間で、質疑応答がなされた。





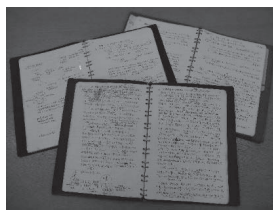
## 概要

2017年秋、『丸山眞男講義録』別冊1・2が刊行されました（東京大学出版会刊）。別冊1（平石直昭・山辺春彦編）は、おもに1956年度の日本政治思想史講義を、別冊2（宮村治雄・山辺春彦編）は、おもに1957年度の講義を、丸山の自筆原稿、聴講生のノートなど丸山文庫所蔵資料を用いて復元したものです。丸山にとって1950年代後半は、『日本政治思想史研究』（1952年）で展開した儒学→古学→国学という思想史像から、「文化接触」「開国」を契機とした思想史像、日本人の意識の「古層」「執拗低音」の把握をめざす思想史への転換をはかった、重要な時期です。また、日米安保体制確立後、政府が国を戦前に回帰させようとしていると考えられたこの時代は、多くの知識人にとっても、自身の態度決定にかかわる重要な時期でした。本「研究会」では、丸山の講義を対象に、彼の思想史認識や同時代の知識人の思想空間・思想史について議論してゆくことを期しています。

本「研究会」には、ぜひ事前に同書をご参照のうえご参集ください。当日は、編者による解説等も行われます。なお、『丸山眞男講義録』別冊1・2は、東京女子大学「丸山眞男研究プロジェクト」（2012～16年度）による成果です。

## 登壇者

『講義録』編者	平石直昭（ひらいし・なおあき） 1945年生れ。東京大学名誉教授。2017年3月まで丸山眞男文庫顧問。著書に『日本政治思想史：近世を中心に』（改訂版、放送大学教育振興会、2001）など。
	宮村治雄（みやむら・はるお） 1947年生れ。元成蹊大学教授。成蹊大学アジア太平洋研究センター客員研究員。著書に『戦後精神の政治学：丸山眞男・藤田省三・萩原延寿』（岩波書店、2009）など。
	山辺春彦（やまべ・はるひこ） 1977年生れ。2012～14年度「丸山眞男研究プロジェクト」特任研究員。成蹊大学非常勤講師。論文に「陸羯南の「国民主義」再考」『政治思想研究』第9号（政治思想学会、2009）など。
討論者	都築 勉（つづき・つとむ） 1952年生れ。前信州大学教授。おもな著書に『戦後日本の知識人：丸山眞男とその時代』（世織書房、1995）、『丸山眞男、その人：歴史認識と政治思想』（世織書房、2017）など。
	前田 勉（まえだ・つとむ） 1956年生れ。愛知教育大学教授。おもな著書に『兵学と朱子学・蘭学・国学：近世日本思想史の構図』（平凡社選書、2006）、『江戸教育思想史研究』（思文閣出版、2016）など。



丸山自筆の講義ノート  
（丸山文庫所蔵）

## 丸山眞男文庫

丸山眞男の思索の跡を伝える約2万冊の蔵書と約3万頁の草稿類が1998年に東京女子大学に寄贈されました。東京女子大学は、国際的な丸山眞男研究の拠点となり、貴重な資料がひろく活用されることを願って丸山眞男文庫を設立し、調査と整理を進めるとともに講演会、公開研究会、公開授業等を開催しています。2012年4月より2017年3月まで、研究プロジェクト「20世紀日本における知識人と教養—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」（略称「丸山眞男研究プロジェクト」）を実施、2015年には、丸山眞男文庫バーチャル書庫（<http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/shoko>）、丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ（<http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/archives>）を公開しました。

## 丸山眞男（1914-1996）

20世紀の日本が生んだ世界的な学者・思想家。父・幹治は戦前の代表的政論記者。その友人・長谷川如是閑の薫陶を受けて育った。日本学士院会員、ハーバード大学・プリンストン大学名誉博士、東京大学名誉教授。主著『日本政治思想史研究』『現代政治の思想と行動』は数ヶ国語に翻訳され、世界中に広い読者をもつ。『日本の思想』は岩波新書中でも超ロングセラーの一つである。

南原繁の勧めで日本政治思想史を専攻し、徳川時代における近代的思惟の形成を実証して、この学問分野の確立に資した。また治安維持法による検挙・勾留や一兵卒としての兵営生活の経験などをふまえ、近代日本の天皇制的精神構造を内側から分析し、「抑圧移譲の原理」や「無責任の体系」の仕組みを解明した。さらに福澤諭吉研究を通して明治維新がもつ今日的意義を明らかにし、自発的結社を核とした「市民社会」の形成や「精神的貴族主義」の必要を強調した。永久革命としての民主主義の主張、また戦後の大衆社会状況下での人々の原子化と大衆民主主義の陥穽（画一化）の指摘はこれと裏腹の関係にある。米ソ冷戦の最中に、政治的リアリズムの観点から日本国憲法第九条のもつ世界史的意義を高唱し、国際秩序の再編を構想した。